

# 天を舞う人類の憧れを実現した 若田光一宇宙飛行士の飛天

2009年4月30日、世界で初めて、宇宙での舞踊が国際宇宙ステーションで行われました。

若田光一宇宙飛行士による「飛天」です。約1600年前の遺跡に描かれた、天を舞う人類の憧れが、ついに実現したのです。代表提案者であるお茶の水女子大学の石黒節子名誉教授は、どんな想いでこの飛天を見つめていたのでしょうか。

## 敦煌と法隆寺の飛天から選んだ3つの基本姿勢

敦煌市の郊外にある仏教遺跡・莫高窟はシルクロードの要所であり、中国古代の美術の宝庫です。莫高窟には4500種もの空を飛ぶ天女「飛天」が描かれています。飛天は数百年以上もの時を経て、多種多様に形を変えて日本に伝わり、法隆寺の壁画にも色濃き影響を与えたとされています。花を降らせ、楽を奏しながら平和を祈り、死者の霊を慰め、虚妄を飛行するものです。



## 飛行

指をそろえて腕を伸ばし、足を開かず、できるだけ胸を上げて上体を反らしてくださいとお願いました。若田宇宙飛行士は、最初は緊張していたようですが、そのうちとても上手になって、途中で動きが中断せずに流れていくようになりました。



## 回転

舞踊では回ることが非常に大事な要素です。若田宇宙飛行士には絹の羽衣をまわってもらい、水平方向と垂直方向で回転をお願いしました。首を中心とした回転のイメージはあしかの動きでした。ところが宇宙では、身体の軸があらゆる方向に変化していきました。無重量では、あらゆる方向にあらゆる姿勢で回ることが可能なのです。



## 座禅

宇宙では床がないため、膝を持ち上げるのが大変だったようです。和紙でつくった蓮の花を両手で捧げ、花びらをまいてもらいました。この時の若田宇宙飛行士が、とてもうれしそうな表情で笑っています。その瞬間がとても綺麗で、映像を見た人はみな幸せな気持ちになります。事前に東寺の帝釈天(たいしゃくてん)の写真を宇宙に送ってイメージを膨らませてもらいました。

上記写真9点は、「飛天プロジェクト」石黒節子/JAXA(実施)

今回、若田光一宇宙飛行士には、敦煌と法隆寺に描かれている飛天の形から、「飛行」、「回転」、そして「座禅」の3つの基本姿勢をお願いしました。舞踊は踊ればいいだけではありません。日常から非日常に移行するために、化粧で変身して舞台装置で雰囲気を作り、衣装で演じる人格になりきる。それらすべてが必要なのです。若田宇宙飛行士には仏像の表情も参考にしてもらいました。衣装は帝釈天のイメージでデザインしました。シルクの生地に、

額と首筋などに蓮の生地を使い茶色いアクセントとなっています。100種類ぐらゐの衣装のデザインをしたのですが、化繊は安全審査が厳しくて、苦労しましたね。舞台装置は白いスクリーンを張って、実験装置を隠してもらおうのが精いっぱいでした。宇宙での舞を終えて、今はとても敬虔な気持ち

敦煌の飛天が好きで踊っていた私が、2001年に「宇宙で飛天を」というお話をいただいて、それから実現まで約8年。科学技術と舞踊は、理性と感性、技術と心という反対の世界。実現までこぎ着けたのは奇跡的だとすら思います。若田宇宙飛行士は打ち上げ約半年前の一度の訓練と宇宙滞在中のテレビ会議だけでリハーサルもなしに取り組んでくださいました。通常、振り付けは何か月もダンス



「飛天」に使った蓮の花

と議論しながら進めます。リハーサルなしで行うことはあり得ませんが、若田さんはとてもまじめに何度もやり直ししながら取り組んでくださった。ふつうの人はここまでできないでしょう。宇宙での飛天の舞をすべて終えることができ、今は人智を超えた大きな力で守られているという敬虔な気持ちになりました。来年1月8、9日には東京の新国立劇場で、飛天プロジェクトの集大成となる公演「飛天ファイナル」を予定しています。私自身は、これから地上の人間の生活を楽しむつもりです。聖なる天女に長年関わってきたので、今度は悪女をいっばい演じないと、バランスがとれませんね(笑)。(談)



石黒節子  
ISHIGURO Setsuko  
お茶の水女子大学 名誉教授